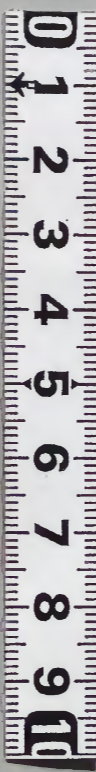


武德成業

三十

内閣文庫	
番號	和 15251
冊數	63(30)
函號	150 12

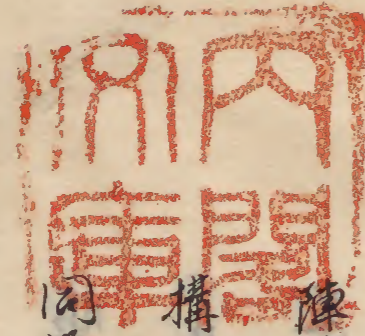
内閣文庫		
五〇	五二	和
函	六五	書
四	三一	類
架	冊	號



武徳成業卷之三十一

浅草書庫

伯耆守加藤正脩編



武家開談
尾後在鳥依知宣ハ秀吉公沙汰之後潛列一子必領を鏡系

陳の時根白江光 治原義弘と足討取羅科とて改易天下也
構及小條氏政ハ奉公する甚回勝家ハ種子佐久間久重ハ家次
河原六郎也政も志原藏故軍務家滅亡の後之遠腹を晴さん
とて紀別(是入新川治原云地をくく)ハ河内之三木ハ津守政
小城を振秀吉をよまたる所く後ハ南河内長蛇の爲帽子取御小笠
里夜くも絶子合戦ハ以れた秀吉公ハ攻落され是も小田

系の城へ入民改小世公小田原藩御より依久間足利氏今度の稱
存る不掛入に世公を秀吉とすに依久間足利氏今度の稱
僅幸と存我小教年たて居くとしよ小田原藩御より依久間足利氏今度の稱
眼を遊んとせし其志微小大丈丈之官事四海の皆秀吉ら
ふ入きれハ心を離し降参しし秀吉と又思ふハ一とて
足依入る久志願小一万を公才源公より一石不備生氏細与
力小田原後由薩也右大坂に由奉らへ是と尾原在也少て由
歌の葉回う一門を小由解先りりまして秀吉を由小身の時より
尾原在也少とて秀吉切也我にれハ由官先を教とて判

髪深衣よて秀吉公小田原藩御より依久間足利氏今度の稱
長正留傳ふ長正秀吉酒匂小由名は由原を成あれ小足
たる大坊より何志を由尋兼く内流しをこれに由藍興也
の元光也由海易に成れ尾原と足小田原小由を下りか根
の端小由成由到原小由由由由由小由物りうと中より秀吉公
由氣也微小由り依久間足利氏今度の稱
由極之尾原也大罪之を謂ふ定教を教て治政も治れ吾て
付度小田原藩御の由公加り治の由をて社を由れ我由り
矣と云る氏改小由公一秀吉後う由の由成之徳同也

忠信カ曹ヲ着ルヘキ者ハ汝ニ増タルナシニ迎忠勝ニ賜ル忠
勝謝メ傳家ノ寶トス時ノ人武門ノ榮トス

明良洪範

秀吉公忠勝ヲ味方ニ引入度思召ケレ尺詞ニモ出ニ給ハス
小田原攻夫ヨリ奥州へ御通ノ節忠勝召サセラレ其節下総
ノテウ南ノ城攻大小ニテ彼地ニ有 神君ノ召ニ依テ
來秀吉ノ御前へ召宇津宮ノ御館ニ於テ奥州ヨリ奉ル佐藤
忠信カ甲ヲ忠信ニ劣ラ又忠勇ノ兵ニ可遣ト思召ノ所ニ忠
ト云義士ト云雙無思召忠勝へ下サル、由ニテ拜領ス其后
御手前ニテ御茶被下其方カ忠勇嘉名世ニ高セシハ吾也

家康ノ恩トハ何レト有時忠勝言下ニ 家康ハ譜代ノ

主一ツ口ニモ申難シ代々ノ厚恩ト申上ル秀吉公其忠情ヲ
深感シ玉フ吾重寶鹿ノ角ノ甲ヲ嫡子ニ譲リ忠信カ甲ハ次
男出雲守忠朝ニ譲リケル忠朝如何思ヒケニ鎧モ不付差置
ル是古キ甲冑ハ心得ナク重代ト云尺難用心ニヤ

天元實記

今度會津發向舟乗吉公の先達者小田原長より出勢を
之諸大名守初の官通を以て忠陣とて中々之に家康の如
目付おと名を足か事おれ一辰とあ解おして出勢發陣の
支度より事とておれおれおれおれおれおれおれおれおれ

とあり御所御書に宇治宮の城に中宮ありきりゆき御書
家室の片念小十郎唯ま一人を色も思ひ人かして宇治宮に
来り城下を隔る禪院止宿して大谷刑部より片念
と使志として中道より先づ初めゆき河角ゆき折ふ
頭より後さきの御所を色中にも也我志を公儀と仰し
先とまうしてふきゆき一向の田舎を初め事辨へゆく要
州道の國風も色と初め無と仰り後今更思入陰悔ゆる所
はさしゆきゆきて若石殿の候より及中殿より次の城下
小今より後さきより宮内御所ありし御達の右折おぼしめし

あつて六部に入るとえのゆき折ふ折りや後い書展公案下ゆきと
ゆきも道中より病氣も候くふ能く候先片念を志中入ると
なり小十郎候の志のゆき中終て後事御侍より箱二ツを拵出
一つの箱の骨と切是る若石齋院の繪圖目錄帳面をゆきとて
大谷へゆき又策まう是る政宗先祖よりお侍の若石齋院
書目録をゆき中骨と切んと致しゆきとて大谷を押しと
箱に骨の先中骨とゆきして我志折り道中よりゆき御書政
宗へは片念を志ゆき折りゆき一箱骨の是より一箱骨の
病氣御書ゆきゆきありゆき後事御侍より及ゆきと志のゆき

政宗跡人と申して宇都宮へ来陣し畿奥列の御所へ入
御りし所也御奥列ふあるとありし大小の武士も大に
勢を我しつゝと宇都宮へ攻出給哉然る後と云信吉也
と違つて秀吉の機嫌と相向しつゝと成りし秀吉云
前後宇都宮の城は違ふと成りし御奥列の御所を
くふ入し幸ひと成りし其後大なることなり秀吉云對面し
依りし家臣片倉と云連判早天を誓ひしとの成りし
勢もなり政宗出陣の如く秀吉對面しつゝと國江相傳に
て政宗片倉料理ありし事也御所は後又秀吉云の事

政宗と申すし幸ひ大谷伴の事と申す政宗前も是れ
時秀吉云と申すの事也大谷の地は是れを言ふは其方持成は
御所並使し候も今度御所はしつゝと御所へ入る候と
ありし御所御所候也我も御所も進出御所は幸ひ御所
御所と申すも首尾候いと申す候し御所は政宗伴の事と申す
于一礼を速罷御所と申す候し大谷は片倉ふりし會候候の
候といは此御所はしつゝと御所は御所は御所は御所は
川の城と候し御所は御所は御所は御所は御所は御所は
かゝる候し御所は御所は御所は御所は御所は御所は

蒲生忠輝もまた此の伊勢の松坂におかれて拾二万石の俵を以て
しを以て拾二万石ありて今津里川の浦より中津里川の
内首尾大浦に拾万石の浦を本村伊勢も小堀も此也其口
の浦より小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
の浦より小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
入魂の舟側通く最末にて今より大身小堀も今津里川
辰中も此の浦より小堀り何れも此の別氏郷も同じく
大身小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院

酒と推量ししりしと之字初宮在陣中の後以末小堀り
武家閑談

秀吉公は前より氏郷退出唐間の様よりかき廻りて
長氏郷大に此所願之下に余に感激しし事とを
ゆ山崎右衛門をそとへ寄言し事とを云氏郷小聲小成
方私よりある小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
成事あり何れ大身小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
在て此の事より小堀り何れも此の別氏郷も同じく此の書院
ふ首尾源よりあると中津里川より

古人物誌
大関小田原陣落去ノ後
権現様ハ八町ノ目通御通被

成奥州へ御越關白秀次公ハ二本松へ御出候時會津ニテ
權現様殘夢ニ御對面殘夢申辨慶ト碁ヲ打候事ヲ御物語申
上候ト也世間ニテ奥州陣ト云合戦ハ無之是ニテ奥州靜り
候ト也

本多佐渡守北國へ被參候時分

權現様駿府ニ御座シ

テ佐渡守事ヲ御シカリ被成候時阿部四郎五郎御前ニ居テ
モウサル、ハ 殿程カケコトヲ被仰事ハアルマシ佐

渡守是ニ居申サストテ左様ニ御呵被成モノカト被申上

權現様御腹立被成四郎五郎ヲ御呵被成候時御次へ夕チ髪

ヲ切り髪ノワケヲ串ニサシ長圍爐裏ニタテ、立退レ候其
後伏見ヨリ秀次ハ右間へ御越被成 權現様ハ京ヨリ

關東へ御越ノ時

權現様ヲ人カウチ可申トテ風説ア

ルヲ四郎五郎キ、テ

權現様へハ隠レナカラ附テ參

御本陣ノワキニ夜モ寢ルヤウニ致サレ候水口ニテ

權現様ノ御伽ニ罷出ルマイ舞ノ與三ト云者四郎五郎ヲ見
付テコナタハ何トシテ爰ニハ御入候ソト問へハ四郎五郎
申サル、ハ加様風説有ト聞候ニ付自然ノヲモアラハト思
ヒ御本陣ノアタリニ居申ト申サレタリ舞々ノ與三其段ヲ

権現様ノ御耳ニタツル

天元實記

蒲生氏郷を合津の守護小中守に依り秀吉云

一由中兵衛西条輝成の代合津を治るは於て早延守護と申

付て一は付より合津は豊洲の押の場不の依り其人物

の權とて事お進と申すと思案致し一故人は易く老を

こゝろぬるを我申も書付下りる其元も思案致し老を

故人中書守まゝ入れお致しとて相成申お極め申とて

家康云の由書付下り秀吉云後長あひ秀吉云の由書付下り

家康云の由書付下り申申用とて得る

の由書付下り一の由書蒲生氏郷二小幡左衛門とて秀吉云

の由書付下り一小幡左衛門二小幡生とて其元も思案致し

一田成成事一二の留りて其元も思案致し其元も思案致し

流中一由書付下り相成申とて一由書付下り何成成事一由

おひかるとて其元も思案致し一由書付下り其元も思案致し

一由書付下り其元も思案致し一由書付下り其元も思案致し

一由書付下り其元も思案致し一由書付下り其元も思案致し

一由書付下り其元も思案致し一由書付下り其元も思案致し

一由書付下り其元も思案致し一由書付下り其元も思案致し

入子とて

老人雜話

氏郷の通智のよりの氏郷小回て曰大岡以後園白友に馬を
送るらんやし氏郷言て云彼も人小随ふよりの誰うらん
と云又同天下のまうらん人の誰うらん言て曰加賀又在馬
寄りと云大納言及又回て曰又在馬つはをゆもい何と云て曰
又在馬ゆもい我ゆへー
東照宮の事を同い言て
是ふ天りてゆへ人よりいも人小知りてさうふ小與つる
器量なよー又在馬い人小加増もいさうさういさういさうい
まわるといさういさういさういさういさういさういさうい

武功實録

氏郷ハ総シテ夜話ニハ化物ノ咄ヲ好シ候事又武者咄ニナ
リテハ互ニ退屈セヌモノト氏郷被存候ヤ化物ノ咄ヨリ武
話ニナリウツリテハ夜白ニ及候ユヘトカク蠟燭ニ換ラカ
キリニ夜話ヲヤメ夏ノ短夜ニハ二換ニテモ夜フケ候ユヘ
短夜ニハ蠟燭ヲミシカクキリテ風所ニトホシ置ナト仕リ
夜話ヲ止メ候由

武徳大成

木村伊勢守ニ葛西大崎三十萬石ヲ封セラル伊達政宗ニ其
舊領羽州米澤長井三拾一カ石ヲ賜ル

武功實録

葛西大崎ハ木村伊勢守會津ハ氏郷ニ賜ル大岡兩人ノ手左

右ニ取テ會津ニ氏郷ヲ置ハ葛西大崎ニ伊勢守ヲ置故也大
崎ニ伊勢守ヲ置ハ會津ニ氏郷ヲ置ケハ十リ互ニ父子兄弟
ノ思ヲナスヘシト宣フ然處ニ政宗ノ謀ニテ一揆ヲオコサ
セ葛西大崎ヲ攻シム氏郷是ヲ聞テ雪中ト言會津ヨリ大崎
邊ヘハ七日路ホトアリニ政宗ノ領分ヲ押通テ大崎ノ後
卷ヲ見事ニツトメラレ候由

氏郷ヲ奥州ヘ被遣トキ大閣袴ヲ御脱候テ氏郷工着セサセ
ラル氏郷ノ袴ヲ御自分召候叔氏郷奥州ヘ被遣事ハ氏郷如
何存候哉ト御尋被成候得者側ノ衆殊ノ外迷惑カリ候ト申

上ラル大閣イカニ左有ヘキコナニ置キ候テハ怖ニキヤツ
ナル故奥ヘ遣ニ候トナリ

天元寶記

或歎秀吉公諸大名其外法中達伽元揚と唯集談話と別
作野天徳寺是ハ元来トモ亦作此の場之の子トハ後々武
徳也跡うも又才揚ももて作也場下天徳寺の住持成
一々故もて作也と云去京初黒谷不隠通の弟と成ておま
と秀吉公聞及テ一國東部葉内志と云て石田了りやう
御前の中ふ如く重れしと云て天徳寺の跡をく口利めていは
と程々の古き新築仕り有秀吉公の御中おけりしと云り

御多にそ夜天徳寺儀武田信玄上杉謙信おのりて出
信玄本日小舟にて古来より甘く産物と申儀と始り
謙信も信州川中流に於て信玄と一戦の別車をとり中
儀と被さる大和を言はれ物と申ておのり儀を悉く巻
ゆと秀吉も少少ひくやあ天徳寺もさうや中儀謙信は
おのりめしうお命もそ長く我も今度お命も別を人小
は長刀と刀居るをそ人小命命と持せし馬の先へまゝ
此儀を被さるるに二坊より早く相果しては命なり何
の産物車をとりたるの計と宣ひおのりて入らぬ

天徳寺をば一免意方の面々何事もあき果しし今附の俗
作化天徳寺富徳寺は誤りて天徳寺事ハ作化修成寺又
宗徳と申する者の才坊をたり

秀吉公白川の城小進向々席蒲生氏郷本村伊藤もあ人
深井長政大谷玄隆石田三成は三人の中達しは我おと儀
世及るお命も申す所と申す尾州押の場おと儀も申す
と申すは外陣守備と申すは合ふに申すお命もあ人た
只今述小舟の美ふゆと申すお命の人数平少くは申奉
公相勤りしり儀ゆと申すお命の人を絶つらと申すお命

我亦も今度洋船の寄所を捨置し上り舟を乗りかへて
彼も之を感し尚も喜ぶ所直に家来とて此れも昔と云々能多の
人とも吟味仕し抱き下可中と云々此れも人教し推業下り
其と奥別と云の者、彼も尚も物に直に申すも、身別
人小事文迷惑仕る事、此れ申す及て奥別、船下捨置
彼も此れを教下し此れ落し出給、事一、事も云々大船、事
も、此れ申す、人の中、此れ何れも相中、一、此れ申す、人の中、此れ申す、
甲船、彼も、事、此れ申す、人の中、此れ申す、人の中、此れ申す、
事、相中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、人の中、此れ申す、

昔も當て此科簡と云色た程の存、此れ申すを於合、此れ申す
中、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、
人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、人の中、此れ申す、
と我亦も此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、人の中、此れ申す、
事、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、
可也、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、
事、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、
早、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、
事、此れ申す、人の中、此れ申す、事、此れ申す、人の中、此れ申す、

武徳大成

八月二十日或ハ九月朔日秀吉京師ニ歸ラル淺野長政石田
三成大谷吉繼ニ命ミテ關東ニ留メ奥州ノ土地ヲ巡見シ國
ノ廣狹ヲ記サシム此月 神君諸臣ニ采地ヲ授ケ給フ

井伊兵部太輔直政ニ上野箕輪ノ城ヲ拾二萬石封セラル後
命有テ箕輪ノ城ヲ高崎ヘ移ヌ本多中務太輔忠勝ニ上総小
多喜城拾万石ヲ封セラル榊原式部太輔康政ニ上野館林城
拾万石ヲ封セラル大久保七郎右衛門忠世ハ相摸小田原城
四万石後ニ五千石ヲ加ヘ賜フ

武功實録

小笠原越中罪アリテ大久保七郎右衛門御預ノ時又女子ノ

罪アリテ同所ニ御預ノモノアリニト越中密通ヌ此段

權現様御耳ニ達ル處御意ニ一段ノ事也其佟夫婦ニセヨ越

中モヤカテ呼出シ召仕フヘシト被仰候由

武徳大成

鳥居彦右衛門元忠ニハ下総矢作城四万石平岩主計頭親吉

ハ上野厩橋四万石松平新六郎康貞ハ

芦田ト號ヌ後ニ
松平右衛門ト稱

上野

藤岡城三万石酒井左衛門尉家次ハ上野雄水城三万石大須

賀出羽守忠政ハ上総久留里城三万石奥平美作守信昌ハ上

野宮崎二万石石川左衛門大夫康通ハ

後ニ長門守
稱ヌ

上野鳴海

二万石小笠原信濃守秀政ハ下総古河城二万石本多豊後守

廣孝ハ上野白井二万石牧野右馬允康成ハ上野大胡二万石

菅沼小太膳ハ上野吉井二万石松平三郎太郎康元ハ後ニ因幡守ト

又稱下総國關宿城二万石松平周防守康重ハ武藏崎西二万石

内藤彌次右衛門尉家成ハ上総佐貫二万石高力河内守清長

ハ武藏岩槻城二万石岡部内膳正長盛ハ上総下総數箇所一

万二千石諏訪安藝守頼忠ハ武藏奈良ノ利蛭川一万二千石

松平主殿助家忠ハ武藏忍城一万石酒井河内守重忠ハ武藏

河越一万石大久保治部大輔忠隣後ニ相模守ト稱ス武藏桐生一万

石菅沼新八郎定盈後ニ織部ト稱ス上野阿市一万石久野三郎左衛

門尉宗能ハ下総ノ數邑一万三千石松平丹波守康長ハ武藏

東方一万石松平和泉守家乗ハ上野那波一万石保科甚四郎

正光ハ後ニ肥後守ト稱ス下総ノ數邑一万石松平玄蕃頭家清ハ武

藏八幡山一万石松平内膳正家廣ハ上野松山一万石菅沼山

城守定政ハ後ニ土岐氏ト改ム下総相馬一萬石内藤三左衛門信成ハ

亘州蕪山ノ城一万石松平原七郎康直ハ武藏深谷一万石小

笠原掃部頭信嶺ハ武藏本庄一万石本多佐渡守正信ハ相州

甘繩一万石

續閑談

本多佐渡守正信ノ人傑ハ世ノ為ニ如筆ト云々及々

権現権より四軍の卒隊あり上系の前松永澤正是人と見え
て曰 家康の正信人傑不足皆南と好む然も楯中
多活八節正信不剛ふ柔不飾殆と凡人小あもといり大因
秀吉正信とす及んで 権現権小若て是と云別正
信江戸より伏見入り所目見ととりて家康 権現権
の正信と何ひ一夕増田右馬守射方小以て人を退け家康救別
少て帳と書ありる、豊朝正信とて江戸に泊る増田何と
執りしん秀吉告敵とて智め流つを

明良洪範

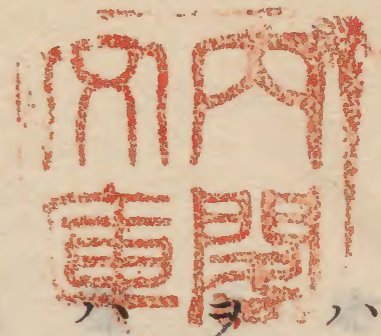
本多佐渡守正信古代執權批判並上野女正純教訓正信ハ本

多彌又ト云小身外様ヨリ 神君取立謀臣ノ其獨ニ召
仕ハレ 秀忠公ハ鹽梅第一ノ臣ニ付ラル、人ノ一生
万石ノ上ヲ望マズ度、御加恩被仰出ケレトモ固辞ニテ是
ヲ請ス其威儀徳澤並フ人モナク嫡男正純ハ宇津宮十八万
石ヲ領スト云凡上下不知猛威ヲ振イ正信ノ人ト成ヲ忘テ
社ハ其子出羽守正勝凡ニ自暴自棄也正純ハ十八歳ニメ石
田治部少輔ヲモ預器量モ勝レタリ 神君ノ愛臣ト聞
テ人々恐テ威ニ服スル人多正信曰謀臣ノ氏族ヲ能スルヲ
ハ少ク多ハ祀ヲ断ルヲ知テ計策ヲ奉ル是忠ニ身ヲ忘レ

サレ様ニシ是英雄ニ有英雄多ハ逆心スル多ハ大身ニナル
ト後トニアリトテ正信一生小身ニテ奢ル色少モ十ク正信
申ケルハ皆天命ヲ知りナカラ北條義時主君ノ跡ヲ断メ已
カ威ヲ逞クシ

天子ニ敵シ御位ヲ改ルナト大ナル耻辱ナレ死其廷臣是ヲ
能トト思イ北條ニ荷擔シ其后モ北條ヲ似スル者多然凡北
條程モ計者無細川勝元先祖頼之カ行跡ヲ學スメ北條カ跡
ヲ追應仁ノ乱ヲ引出セリ其元ハ細川ト山名カ威ヲ擅ニス
ル故之其人志ヲ立名ヲ後代ニ上ル故共ニ死亡ノ柳營モ威

ヲ失ヘリ上野人夫是ヲ思ハ勝元奢ヲ究ルモ其子政元忠義
有ハ世ハ治ルヘキニ政元彌奢ヲ究將軍義村公ヲ退幼君義
澄公ヲ伊豆ヨリ申上セ奉リ已カ威ヲ擅ニセシカ是忠信ト
ヤ云レ其身モ又亡タリ正純能兼レ武家ハ軍法ヲ諸道ノ根
元トス軍法ト云軍スル地道計ニ用ルニ非ス軍法則常備也
軍法ハ體用ヲ肝要トスル也軍スル地陰陽軍ノ全體也常
ノ備トハ善政ハ勝惡政ハ負勝ノ元ハ治國ニ有タトハ植
木ノ根入深能榮ル所ハ元培所ノ始ニ有ヘシ夫ヨリ段々午
入ニテ花實モ能多少々枝ヲ折ル、連モ痛フナシ此心ニ天



下國家ノ其本トスル所ノ大寶ヲ取失又様ニスヘシ大寶ト
 ハ天下ノ四民ニメ基士ノ司タル者ハ家ノ老職也故ニ四民
 ヲ以木ノ根ニ培フ如ニ憐ヘシ諸士ハ木ノ如ニ合戦ノ仕形
 ハ枝葉ト同シ勝負ハ花實ニ齊シケレハ其元失ヘカラス忠
 信ヲ盡ヨリ諸事ハ出ルソ凡忠ヲ盡ニ色々有身ヲ以忠ヲ致
 者モ有心ヲ以忠ヲ致モ有家老士大將杯ノ忠ハ主人ノ前ヘ
 一月ニ一度出ストモ心底一ツノ忠膽ヲ以君ヲ守護シ政道
 順路ヲ以君ノ嘉名ヲ高ルソ亦忠ニ似タル不忠有石田治部
 少上慢上根ナル人故ニ大風雨ノ夜杯ハ御城廻破損ノ一

々明朝卯刻ニ言上ス御普請奉行ヨリハ己ノ刻ニ言上ス日
 日夜々ノ勤モ大形ナラス是ラハ家老ノ意地トヤ云ニ人愛
 能分別顔ニ見ルモ斯ル老臣ハ家ノ爲家中ノ爲ニ成ヘカラス
 人ハ心入社大事ノ物ナレ一言ノ情ニ一命ヲ惜又ハ義士ト
 知ヘシ取分老職ハ心一ツノ物ニテ忠信ヲ心ニ深掛テ思ヘ
 ハ位階職分身體ヨリ引下テ持ヘシ吾ヲ佐渡守ニ被成品能
 召仕ルレ元ヨリ愚癡闇鈍ノ者ナレハ万ツ上ノ御慈悲ニ
 テ今日迄モ御奉公勤タリ賤モ御口真似ヲモ勤ハ正純品高
 召仕ル、死後ノ心少モ有ヘカラス奢心少モ有ハ不忠不孝

一 部拾石	吉田新造	一 五拾石	野々山勘助
一 三拾石	三宅四郎左衛門	一 三拾石	菅沼彌助
一 部拾石	長坂合兵	一 百拾石	三宅合兵
一 百貳拾石	河原民部	一 七拾石	河原傳三郎
一 三拾石	河原勘助	一 部拾石	河原勘助
一 八拾石	中条小左衛門	一 百石	中条仁右衛門
一 三拾石	加納左衛門	一 百石	加納左衛門
一 六拾石	三宅平兵衛	一 六拾石	三宅勘助
一 七拾石	三宅勘助	一 百石	三宅勘助

一 百石	三宅久之次	一 百石	三宅勘助
一 七拾石	中目十左衛門	一 四拾石	光持三九郎
一 三拾石	奥村左衛門	一 四拾石	奥村左衛門
一 三拾石	三宅勘助	一 三拾石	三宅勘助
一 三拾石	光持忠兵衛	一 七拾石	光持忠兵衛
一 九拾石	三宅勘助	一 高不知	三宅勘助

武徳大成

三浦監物ハ下総佐倉領一萬石木曾平三郎ハ下総足戸一萬石ヲ領セシム酒井雅樂頭忠世ハ武藏河越領五千石石川日向守家成ハ上野布河五千石阿部伊豫守正勝ハ市原卿五千

石大久保治右衛門忠佐ハ上総裳原五千石西尾隱岐守吉次
ハ奈化川五千石高木主水正清ハ相州武州総州所々五千石
内藤四郎左衛門正茂ハ武州柄間五千石
古人物語
美濃ニバ、狐ト云者アリ名譽ニ人ヲタマス人ノ目ニ不見
或ハ肩ニ乗又ハ手ニ乗リテ切ラントスレハ其終飛去若キ
者トモ切ルヘシトテ色々ニス内藤四郎左衛門ナシテモ手
へ乗タラハ切ヘシト云ハ狐形ハミセス云ケルハ其方ノ
手へ乗タラハ手共ニ切ヘシト思ハル左様ノ人ニハノラ又
トイヘリ内藤手柄甲斐々々敷トシレタルニ

武徳大成

山本帶刀ハ下総佐倉領五千石松平五左衛門近正ハ上州三
藏五千石戸田左門一西ハ武州久志羅井五千石本多縫殿外
康俊ハ佐倉領五千石三宅惣右衛門康貞ハ武州瓶尻五千石
三宅彌次兵衛正貞ハ武州内野五千石永井右近太夫直勝ハ
武州數邑五千石松平紀伊守家信ハ上総直井五千石青山常
陸外忠成ハ相州中郡五千石神谷弥五郎ハ武州數邑五千石
内藤修理外正成ハ相州當摩五千石柴田七九郎ハ武州葛浦
五千石戸田三郎右衛門尉忠次ハ豆洲下田五千石西郷孫九
郎家貞ハ後ニ彈正
稱ス下総小弓五千石酒井与七郎忠利ハ後ニ備
後守ト

稱河越領三千石設樂甚三郎貞光ハ武州禮羽三千石本多作
左衛門重次ハ上総小井戸三千石植村庄右衛門恭忠後ニ土佐守ト
稱上総勝浦三千石稻垣平右衛門長茂後野右馬允家臣ナリシカ是月ヨリ麾下ノ
士ト上州新川相原三千石松平三郎四郎定勝後ニ隱岐守ト稱ス下総
小南三千石渡邊半藏守綱ハ采邑三千石松平外記伊昌ハ下
総飯沼二千石坪内喜八郎利定後ニ玄蕃ト稱ス武州稻毛峯郷二
千石高木九助正次ハ武州數邑千石各領地ヲ賜フ此外麾下
ノ群士各々禄ヲ給采邑ヲ授ケラル安房ノ里見氏結城晴朝
宇都宮國綱舊領ヲ賜リテ各麾下ニ屬スル北條左衛門太夫

氏勝總州岩留ノ城一万五千石ヲ賜リ麾下ニ列ス此比近習
外様ノ郡士ヲ五組ニ分ケ給フ井伊直政本多忠勝榊原康政
石川長門守康通平岩主計頭親吉其頭ニ仰付ラレ京伏見へ
替リ々一組宛番ヲ勤ム

續開談

天正十八寅年國東津入國の時分脇長及是より百餘番ノ作付
弱年よりノ忠功を以て武州小堀系ゆく知行ヲ下シ在八拾一第
少くニ病死也
四年後後者若政ハ初ク入信ト云ハ少ノ民間小ありし或時知の群
に依り善くし知を或侍若意メ人右邊法ヲ持せく在りしヲを

懇々と見せて侍向し女もの人倫をなすと頓悟して百姓
と云く侍と成若輩の如くして官初長祥坊小侍と云給ふ三
石守り時小侍歟と云う自身織る麻布一端を給うれば
組向くを給に滞させりふ巴の故を分る由後述定致と
是又磐州官制より小冠者を招き召をりる由志甲斐と
爰知久のいふを以て佐む別官系と存する之愛年月を經
りたる信長秀吉の二代長祥坊軍功ありて秀吉山陰道退
治ありて江州に在るの長祥坊を同分取鳥居石余を賜り同
懐仰慕の法を依組小階と云交して予高石を田中秀政に

与りる故三好秀政又長祥坊の養子中と云うは元ら是れ一
別家なるに由りて小侍と云同左近衛と云侍と秀政は階屬を
なすと官初小令せりて長祥坊階は後持より長三絶類
の勇士今先方の物なるに於て其早業老裏也一事友
田中秀政より身て亦任せられりて是れ由りて侍と云ひ田中
と秀政とは一む別五石石成賜りあり秀政播州池田を
賜りて勝入の田中入部の時池田家の主體の素いしと云
長三はけ小侍と秀政の腰卒遊りありて引給りて長
三と云はれは田中別續柄を自身持く家の由りて二二編より

りり押入忽ち留りりし時面をさへ色こつ早あつた後
秀吉之入秀次田中をえを流ひりれい否改らぬぬらうしり
概して能男ふあうらうしてふ石加増あり押けとの秀次へ
附屬の子細の各様防先進る但別退付の付水尾と云
ふ小坂谷路河もこ中人を牽くもさ北の張陳をけ付た
官初らも早う十八勝を毎夜さうけ惣軍終る前まで駆入
りり時田中の長刀を拵て紙子取藏とて黒の馬を牽り一
番、駆入垣角守大坂新を過ると云但馬丹後小隠れをい富士
の故いさふ胸板をたふとらんかまうかけて函されお夫を身

のさ中へあうらうと云ふお夫をぬうてさ色勝を討史
りりして法軍終て突入越後山を後田情但馬平物
て垣角も官初らも早う初て對面の付音を拵て田中を
獲るはりり也け石に秀次へ附も色又秀吉もふ勸信して
三洲園湯雨尾を城を去ふ十八年より流文を園原漸
く
権現様より後後を揚りこまを折川を直して其
方の後後をさし路め向杵を致不と定め長尾よりと稱述
三洲大沼信士赤村九郎左衛門官をえを今度 権現様
流傳めて小田原の由陳を其子二若也を後園東山入園の由

と少く三別より書ふを携へ一帯小江府ふりて府小江并
基三席利勝後任大 山由及らるる如藤原と新色字初書子
と引紙り後清感ふ斜藤原の流りて一と如也と作後輩三
付乱髪少て遂河目見兼る頭と嗜ら由及上穂くも教内通
少てはり如致益を領る強外清権臣の余り何系然秀
忠とと口くして二名無)酒と嗜ら由及上穂と撰んで初を
任科一夜名合せらる相創言新歌の内高藤沢村研
とと場々 台徳公より御事平清文并清資の
そ筆ともに家ゆ侍人文祿元年相解心成めしと

肥前名護をもちて清助産の供奉也一め大和赤坂百五
拾儀を賜り給合部石松石と成一大中書よりて(関ヶ原に
と出陣と慶長十七年十月廿二日卒とて身源去席一
元政六十二歳少く天正十年より 台徳公(勤仕
中州此れ如光之三在也)は又九席在也小出をもちて卒とらる
ゆへ父の遺願兼自分の願ももれ五席名を清文を後慶
長十九年大坂の清陣兼此自分とあり相三其清陣小出中
へと如也壇の内高藤の流りて身源は如に あり及
上邊ゆへ送る部石松石の中加恩りり都合七石部松石板

彌め流る中交渉忠節より一と著ふ伊弉利門を
三葉門せしむ河思ひらん内より一門を閉ざしを入伊弉
科人の側ありき殿上の忠節を捨て道なきありし
今大勢を害し四腹なりし一門の親敵のため能事と
あらん果るやうくの誤りて又の迷ふをさるべき度ふらう
く其ふ身とすうせ流る葉親への存忠の忠と其今く
まへしとは後らるに科人も彼忠存の存忠と感し強辭に
其心とけて伊弉利門に繩をとりてそ出る法人大に
作天しして其器量たるを感し其誠を物と動し鬼神

を感するも是れありしと稱讃をよ上よも厚く褒美し
流るるを

岩淵夜話

天正の比わひ國東よ於てし張成事の存忠子葉、原東よあ
酒井とやらひは時代より葉殿より孫のふ佐念よを稱り
系と家名を第次の傳ふ是れありしとの千葉殿より感懐は
又原より家名より上流と遠く合の傳ふ酒井は處つ國國土氣
の傳ふ酒井佐念も是れありしとあり家名よりしとの
系より感懐を傳ふあり時の俗は俗をな流るしとやら
あり傳ふに天正十八年山田東山傳家城亡の後大國を

の北條國を北條持の國と

家康云北條を北條

持を國東所入國と世伝ふやあり北條家の法度人

は皆ふよむより引傳を以て御帳ふ

所家北條奉云

平をより傳ふ御帳の上教入御帳也云云此は御帳の

原う子の吉丸堂合の酒井の子合之節と御奉云人と成

細ふ山別伏見の御普後の時

家康云御普の月御

此の事と吉丸堂各御伝ふく此の吉丸御帳のあと持

た弟殿をよむよむ事ありともよむくや夫天小敷雲石の

よふはくともい居らるる合之節云々のこと弟殿をよむて

くくせり相番申是と自らて近比迄及治牙あり能い

成入魂の節月られのよと御侍の目の前とて友侍軍に奉

履をよむしてをよむるといふ事や何と専ふよむはも其長

の御徳の中御代を申よとてさ安祥山中園後なるも御代

を御傳して御を流り新ら吉丸の申よとてよ上吉丸甲別

元吉丸堂元と云ふ御の御をよむて何事と云ふと一

かこすふ成て互小腰と云ふ御ありと云ふまら御丹

も中法のよと云ふ有と云ふく同吉丸相後して御耳

小入丸

家康云よむ御をよむ御をよむと云ふ御をよむ

小思をりる折る毎れい合之席より前と申す味と如く思ふ合
三席中より只一人と云ふに
河原へは言出侍等に
此城のゆきと云ふ所の御と申す其の丸の玉我等の家名で
此等若くはの衣丸貴天ふまありあくは細快ふと云ふ
と申す事りて草履成持はしうせやの山平の子弟と
此等若くはの衣丸貴天ふまありあくは細快ふと云ふ
心せり其のうら
家名と思ひ思ふ事あるれ
此比頼母交侍如しと云ふ事と云ふ後出加増と云ふ始先名や

角と批判ヤ一角と云ふは
味候うもと感一もも也其の度出語本語人の久入批判
留りて其の度の中にも及も一度若くは政有く一日も死
と信するにんこそ若くは能は余成上利ても其のれを原
く心入を致しし心ておきとて其勤の立ぬ事と云ふ
しとて其の事今々今々の事能々の風俗なり
酒井 小太
前家長推原貴前中村物雲高村
お名酒井左門四郎と人再とてお名

は門下中より一りあるを良我中より一りを門下中より一り
よりあるを登御しし門下中より一りあるを良我中より一り
良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
其の良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
門下中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
其の良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
小の良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
以通り良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
門下中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り

よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り
よとあるを良我中より一りあるを良我中より一りあるを良我中より一り

家康公聞はてまいとて方こそ人の二まい又ハ誰を其道
の功者成志の事とてまことの事と御給ふ事後之節兼上長
のしつと方めてふ金山小御の切ふ多しは存其若とも
のお徳はを常く及兼いと申しよるよ存志うハ海の家のお徳
と止め合を御奉給ふ事と作り。後之節兼何れ
後之節兼いと御借と申し御業を止才子不譲り國々の山師
等を呼集しとてを御して伊豆國の山入致し掃子とて
てて是夜の境りゆく場らせらる那は後の一とて申し
る所の合報出し江戸へ廻る存 家康公御機

嫌漬うとて後之節兼大久保宿に在り申す別八もあて
知行は下瀬の事と推し合は御し申す代役の事
よ下野百人より同分のしつと在は後ハ伊豆の山斗に
りしつと國東町に在りて金山と申すは後之節兼の國々
後り金山の仕置申す存其後ハかくのしつと御給ふ
お徳と申しつとも存其心とて申すは別遣する才一身の本
とて申す事と極め申す事有と申すは申すお徳及
人を御し 公儀と申す事多し御れしつとも存
一代ハ別事ゆく是後お申して積悪露顯の上ふしつとも

